
真剣で私に恋しなさい！！ - 開かれる修羅の門 -

風

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！！ - 開かれる修羅の門 -

【Nコード】

N 6 4 4 7 P

【作者名】

風

【あらすじ】

毎日のようにイジメられていた少年　それを救った少女　この2人から始まる物語。誰よりも優しく、少しばかり泣き虫で頼りない主人公『伊織』と風間ファミリーとの川神市を舞台にしたシリ阿斯あり・ほのぼのあり・バトルあり・ギャグあり？のお話です。

運命の出会い（前書き）

初見の方はじめまして、前作を知っていらっしゃる方お久しぶりで
す。

とにかく頑張ります！一生懸命に頑張ります！それはもう頑張ります！

この作品を見ていただいている皆様に最大の感謝を・・・。

運命の出会い

少年は泣いていた。

同年代の子と比べ体の小さかった少年は、イジメの対象になった。

毎日のように繰り返されるイジメ。

数少ない友達に助けを求めた。

最初は助けてくれていた友達もいつしか助けてくれなくなった。

少年は泣き続けた。

でもなにも変わらなかった。

どうして泣いている？

うつむく僕に聞こえてきたのは女の子の声だった。

「イジメられているんだ……」

そうか。わたしがしかえしてやる！つれていけ！

いきなり現われた女の子はそう言った。

「でもあいてはいっぱい、いるよ？」

かんけない。わたしをだれだとおもってる！

「だれなの？」

わたしは・・・だ！

イジメはなくなった。

助けてくれた女の子とは仲良くなりいつも後について回っていた。

それも長くは続かなかった。

両親が事故に会い、突然引越すことになった。

いつものように泣いていた僕。

「これおまえにあげるよ」

「いいの？」

「ああ、わたしといたおもいでだ」

「うん！！ありがとう」

そして僕とあの子は離ればなれになった。

僕はあの時、助けてくれた女の子の後ろ姿を忘れない。

運命の出会い（後書き）

更新は三日〜一週間くらいに一度になると思います
執筆速度が最悪なまでに遅いのです……。

よければポイントをつけてやってくださいw

感想・要望・批判・アドバイス是非何でも言ってください。その一言が作者の原動力となり頑張ることが出来ます！

少年の变革、そして旅立ち（前書き）

連投！

少年の変革、そして旅立ち

両親が事故に遭った……。

イジメられていた日々から抜け出し、ようやく手にすることができた楽しい日常が崩れる出来事だった。

両親がいなくなった僕は母方の家に引き取られることになり、生まれ育った川神市を旅立つことになった。

あの日を救いだしてくれた少女を忘れないためにも僕は初めて拳を握った。雨の日も風の日も拳を振り続けた。最初は見様見真似で始めたことだったが時間が経つにつれて、ただのパンチは完成された正拳突きに変わる。

パンチだけと思われるかもしれないが、あの時僕が少女の動きの中で辛うじて見えたのが正拳突きと呼ばれるものだったからだ。

ある日僕は薄汚れたノートを見つけた。中には体が小さい男の人が満身創痍になりながらも戦い抜いた記録と雑誌から切り抜かれたスナップが貼っており、ノートの端々には《陸奥 九十九》と書かかれていた。

「……じいちゃん？」

すぐに祖父に尋ねた。すると祖父は微笑みながら話してくれた。

自分が1000年もの間不敗を誇る古武術《陸奥圓明流》の伝承者だったこと。その古武術を用いあらゆる場所に、ある時は海外へと足を延ばし戦ったこと。その中で出会った人々のことなどを僕に語ってくれた。

祖父の話を聞いているうちに僕はある思いが生まれた。

「僕も強くなれるかな？」

自然に出た言葉だった。

「強さにはいろんなモノがある。伊織、お前は どうして強くなりた
いと思った？」

川神市に住んでいる時にイジメに遭っていたこと。出会った少女に助けられたこと。その少女を思いパンチ（正拳突き）の練習をしていること。自分の思いを全てうちあげた。

「そうかそうか…強くなりたいんだな？」

話を黙って聞いていた祖父は僕の頭を撫でながら聞いてきた。

僕の答えは決まっていた。

「うん！僕強くなりたい！！」

「お前の覚悟聞き届けた。俺が強くしてやる」

祖父の下で修行することになり、その日から強くなる為の鍛錬が開始された。

修行が始まると技などを教えてくれると思っていた僕の考えは甘かったと知ることになる。体づくりと称してひたすら走らされ、その後は器具を一切使わずに筋トレをする。

そんな日々が5年続いた。

「じいちゃん今日も行ってくる」

ストレッチも終え祖父に話しかけた。

「伊織帰ってきたら俺と試合だ」

僕は歓喜した。どれだけ頼み込んでも「まだだ」と言い組み手すらしてくれなかった祖父が試合をしてくれると言ったからだ。

どれだけ待ち望んでいたことが……帰ってきた僕は意気揚々と祖父との試合に臨んだ。

結果は完全なる敗北。手も足も出ず、触れることすらできなかった。

「じいちゃん強すぎ……」

僕の言葉を聞き祖父は笑いながら家に戻って行った。

走り込み・筋トレに加え、祖父との試合が日課になった。

その後も祖父に勝てず相変わらずボコボコにされる日々が続いた。

「これでどうだッ!!」

最近になって僕の攻撃が徐々に当たるようになってきていた。

「甘い!」

だが直撃しても大したダメージを与えられず反撃されていた。

攻撃が当たった瞬間、力の方向に合わせ飛んで衝撃を逃がす。どれだけ重い攻撃もそれをされては意味がなかった。

祖父の攻撃を同じようにして防ごうとしたが五回に一回成功すれば良い方で、ほとんどが失敗に終わり気を失うまでやり続けた。

一か月もすればできるようになり対処法もいくつか思いついた。そのなかの1つが投げ。

打撃と思わせ祖父の懐に入った僕に待っていたのは驚愕と痛みだった。

腕を捕られ肘の逆関節を極められ投げられていた。

この時は手加減されていたけど、《陸奥圓明流》の組み技には『投げる』『極める』『折る』が一連の流れの中で同時に行なわなければならぬらしい。

祖父は決して口では何も教えてはくれなかった。どんな些細なことでも僕に受けさせた。

そこから自分で考え学べと言わんばかりに。

そして月日は流れ

「伊織お前は強くなった。この試合…いやこの死合いで最後だ」

そう言っ て構える祖父の姿に僕は震えた。

「お願いします!!」

開始の合図なんてなくとも僕と祖父は同時に飛び出し、そして衝突した。

「はあはあ…やった。じいちゃんに勝てた……」

何回、何十回、何百回、何千回と行なった試合の中で《陸奥圓明流》をその身で受け、覚え、使い、極める。それを繰り返した僕は成長していた。

「伊織ようやった。これでお前に教えることはなくなった」

地面に倒れる祖父はそう言って微笑んでくれた。

「これからはお前が《陸奥圓明流》だ」

祖父は立ち上がると傍に置いてあつた道着を僕に手渡してきた。

「じいちゃんこれは？」

「ワシが昔使っていた道着だ。使ってくれ」

「そつか…じゃあ、ありがたく貰っておくよ」

この時、鍛え始めた幼い時からの思いを告げなければいけない気がして口を動かした。

「じいちゃん、あのさ「行つてこい。好きにするといい」！？」

祖父はわかつていたようだ。僕が川神市に……いやあの時の女の子に会いに行こうとしていたことが。

「グズツ…今日まで…ありがとっ、グズツ……ありがとっござい
ました！！」

何年振りかに出た涙は、感謝の涙だった。

「はっはっは、舞子ッ！飯だ！伊織の旅立ちへの祝いに美味しい飯と酒を用意してくれ！」

「わかりましたよ」

この後、ばあちゃんが作ってくれた豪勢な料理を三人で囲んで食べた。

死合いで腕が折れた祖父の背中を流すために一緒に風呂に入った。

「この傷も、この痣も…全部いい思い出だよ」

そう僕の体には何年もの間、祖父との試合の中で出来た無数の傷や痣が残っていた。

「泣き虫小僧だったお前も一人前の…男の顔をするようになったな」

「やめてくれよ。泣き虫って言っただって昔のことだろう」

「お前は」

風の音に掻き消されてしまい祖父が何を言ったのかはわからなかった。

祖父の顔を見ると何故か聞き返す気にはなれず、そのまま聞き流す感じになってしまった。

「じいちゃん」

「なんだ？」

「今日からは“陸奥 伊織”って名乗るよ」

幼い日の少女を思い、祖父に鍛えられた僕の中に生まれた決意だった。

「その名は重いぞ?」

「いいんだよ。これは僕の望んだことだから」

一言二言交わした僕と祖父は風呂をあとにした。

翌日の朝、僕は祖父母が寝静まっている間に家を出た。直接会ってしまおうと泣くかもしれないからだった。

川神市へと向かおうとすると荷物の中に自分では入れた覚えのない包が入っていることに気付く。

「(なんだコレ?)」

包の中には「好きに使え!」と書かれた手紙といくらかのお金、それとまだ温かいおにぎりが入っていた。お金は祖父が、おにぎりは祖母が握ってくれたモノだろう。

不覚にも涙が出た。

「ありがとうございましたーッッッッ!.....!.....!」

振り返った僕は深く頭を下げ大きく叫んだ。

できるだけ多くの感謝の気持ちを込めて……。

「1000年もの間不敗を誇る“陸奥圓明流”
それを名乗ると決意した少年は
いったい何を魅せてくれるのか
」

少年の変革、そして旅立ち（後書き）

まじこいの世界にいるのに原作キャラが出てこない
出てきたら、きたでキャラ崩壊になることが懸念されますが……気
にしないw気にしないw

感想等ばっちこーい！

舞台は川神市（前書き）

一人称・三人称がごちゃ混ぜであります!!! うわっ、何をするや m (ry

...
~ぬい、ん

舞台は川神市

十数年振りに川神市に戻ってきた。

「ふう……ようちか」

あの後川神市へ向け意気揚々と出発した。だけど辿り着くのに二年以上も掛かってしまうとは思ってもよらなかった。

僕は川神市に行く手段として航路を選んだ。理由は一度船に乗ってみたかった！しかもなんとなく……これが間違いだったんだ。

船に乗りうつしたんだけどお金が足らなかった。諦めきれない僕は川神市の隣にある七浜行きのコンテナ船に乗り込んだ。今思えば完全な犯罪なんだけどこの際どうでもいいや。

[illegible]

約一年前。

長い船旅も終わりようやく辿り着いたと思った僕の視界に飛び込

んできたのは、七浜ではなかった。よくわからない場所で聞こえてくる声も知らない言葉ばかりだった。

「（あれ？ここどこだ……？）」

僕はおろかなことに七浜行きではなく、外国へと向かうコンテナ船に潜り込んでしまっていた。この時ほど「悪いことはやっちゃいけないんだなー」と思った瞬間はなかった。

もう一度コンテナ船に潜り込もうとは思わなかった。何故か同じ目に合う気がしたからだ。

船を降りた僕を待っていたのは言語の壁。お金を稼ごうと働き口を探しても言葉がわからず、身ぶり手ぶりでは相手にしてもらえない日々が続いた。

どうにかしてようやく話を聞いてくれる男を見つけることができた時は心から安堵した。

話を聞いてくれる男に僕はどこかよくわからない場所へと連れて行かれた。身体検査などを受けたあと、船に乘せられ違う国へと渡った。

訪れた先で僕は与えられた仕事を毎日やり続けた。

最初は言葉がわからず苦勞した。言葉を覚えだした頃には二カ月も立っていて、一向に払われない給金を不思議に思いだした頃でもあった。

「あのさ、ココのお給料っていつもらえるのかな？」

「給料つてお前……出るわけねえだろ。ココにいるヤツは皆売られてきたんだ。ようするに奴隷ってことさ……」

「え？」

同僚だった男の言葉に僕は戸惑いを隠しきれなかった。

そう僕は騙されていた。初めに会った男は仕事を紹介してくれたわけではなく、ただ僕をココの持ち主に売っていたのだった。

戸惑いの後に込み上がってきたのは怒り。

すぐさま雇い主……（いや飼い主って言ったほうがいいかな？）の所に乗込み、ボコボコにしてやった。働いていた期間のお金をしっかりと徴収した僕は、同僚の皆にもお金を支払うように言い含めその場をあとにした。

行き先は決まっていた。

騙したヤツらをこの手で叩きのめす為に最初の街に戻った。ようやく見つけることのできた人身売買の組織だったけど、僕が着いた頃には跡形も無く消え去っていた。近隣住民の人に話を聞くと『どのかの軍人のような人が突如現れ、何十人もいた男たちをものの数十秒で薙ぎ倒し颯爽と去って行った』とのことだった。

僕の手で潰せなかったのは残念だったけど、その軍人さんには感謝した。たった一つの組織でも潰れれば被害者が減る。

目撃者の人に軍人さんの特徴を聞き、お礼を言うために探しまわった。いくつかの戦場に赴き情報を集め続け苦勞の末、ついにドイ

ツ軍の人だということがわかった僕はドイツに向かった。

ドイツではひと悶着あったものの、しっかりとお礼を言うことができた。

何故か氣に入られた僕は短い期間だったけど軍でお世話になった。十分にお金が溜まり、もう一度感謝の気持ちを伝えドイツを旅立つた。

[illegible]

こうして一年以上の月日を経て、川神市に戻ってくることができた伊織だった。

「少年、少しよろしいかな」

背の小さな伊織に話しかける人物が。

「はい、
なんでしょ
うか？」

振り向いた先に居たのは道着を着た、どことなく強さを感じさせる男性だった。

「相当の使い手とお見受けした。ひと手合わせ願いたい！」

突然の申し出に伊織は少々困惑したが、相手の男が本気で言っていることを感じ取り了承した。

街中での果たし合いは周囲への迷惑になることから、場所を変えた伊織と道着を着た男は数メートルの距離で真正面から対峙していた。

「お相手感謝する。名前を聞いてもよろしいかな？」

「伊織です」

伊織が名乗りを上げるのを引き金に両者は構えをとった。

「いざっ！！」

頭部を狙った右の回し蹴りが放たれた。比較的低身長な伊織の頭部を狙ったものとはいえ柔軟な体から放たれる蹴りは速く鋭い。

それを難なく後方へと体を逸らして躲した。

が、それだけで終わらず男はコマのように回転しながら続けざまに回し蹴りを放った。

男はテコンドーの使い手、その柔軟な体から繰り出される蹴りはキレがよく速い。

不安定な状態からでも蹴りを放ってくるが威力があり、直撃でもすれば多大なダメージを受けてしまう。

それをわかっているのか伊織は、男の蹴り1つ1つを見切りで躲

し続けている。

頭部を狙ったアップトリョチャギ（前廻し蹴り）は鼻先を掠めるかどうかの所で後方に仰け反り避ける。見る者がいればまるで舞っているかのような動きだ。

「ちい！」

まるで当たらない自分の蹴りに内心焦りを感じていた男だったが、一度距離を取り気持ちを切り替えた。

攻め続けた男の額には汗が浮かんでいるが、見に回っていた伊織は汗1つ掻いていない。正面から対峙している二人の様子は対象的だった。

しばらく睨みあいが続いが、先に動いたのは伊織。

男は接近する伊織を多彩な蹴り技で牽制したが、蹴りを見せすぎた為に全てを避けられいなされてしまう。

「なぜ当たらない。……ッ!？」

一度落ちつきかけていた男は再び焦りを感じてしまった。抜群のキレを誇っていたアップトリョチャギは腰の入っていない蹴りになり、蹴りに脅威を感じられなくなっていた。

そんな相手の焦りを汲み取った伊織は自分の間合いに入ると男の蹴りを上回る速度で、左上段廻し蹴り放つ。

冷静さを欠いていたとはいえ男も武道家の一人。避けることがで

きなくとも防ぐことはできる。頭部を守るようにして腕を上げた。

「まだです！」

伊織が言葉を発するのと同時に、男の頭部に向かっていていた蹴りは突如軌道が変わる

まさに電光石化。稲妻が走ったかのような軌跡を残し男の下半身に蹴りが突き刺さっていた。

「陸奥圓明流 紫電」

小柄な伊織の攻撃とはいえ、打ち下されるように繰り出された蹴りの威力は高く、直撃した男はその場に膝をついた。

「まだ、終わっていないよ少年」

母国でテコンドーの大会で優勝したことのある男には意地があった。なんとか立ち上がると男は続けて口を動かした。

「負けることは決して恥ではない……だが…自分の全てを出せずに終わるのは恥だ……！」

男はヨップチャギ（横蹴り）を放つ。今日…いや今までの中で自身最高の蹴りを。

次の瞬間、蹴りが伊織の体を捉える。

男は笑っていた。

「少年…君の勝ちだ」

蹴りを放った足は伊織の肘と膝に挟まれ異様な方向へと曲がっていた。

「ギリギリでした。紙一重で今回は僕に軍配があがりましたが、次はどうなるかわかりません」

伊織の言葉を聞いた男は片足という支えをなくし、その場に座り込んだ。

「ありがとう少年…いやファイター。願わくばもう一度闘いたいものだ」

「僕の方こそありがとうございました。その時はまたよろしく願います」

座り込む男に礼をした伊織は手を差し伸べ握手を求める。男は笑顔で、満足のいった表情をしながら握り返した。

「いい仕合いじゃった」

真剣にぶつかり闘った二人の武人に話しかける人物が

。

舞台は川神市（後書き）

なんちゃって戦闘回でした

おそらく現段階で限界の描写です……。

今後の成長に期待する！！

テコンドーの資料をくださったモーディス様ありがとうございました。

感想等ばっちり！

訪れた川神院（前書き）

今回は短い話になります
会話文メインなのでお許しを……。

訪れた川神院

伊織とテコンドーの使い手の仕合いを眺める人物がいた。

「（ほう…アレを防ぎなお且つ折るとは…）」

攻防一体の伊織の動きに感嘆している。

「（はて、あの少年どこか見覚えがあるんじゃないかな…）」

伊織を見つめるその人物は老人だった。しかしただの老人ではなく、その身から歳をまったく感じさせない程の濃密な気を纏っている。

目の前で繰り広げられた仕合いの主役二人に賛辞を送りながら近づいていった。

「いい仕合いじゃった」

昔聞いたことのある声。幼い頃に感じたことのある雰囲気。記憶に残っている人物の名は……。

「……鉄心さん!!」

伊織たちに話しかけた人物は、武神の名を我がモノとし引退してなお世界が恐れる川神鉄心その人だった。

振り向いた伊織の顔には満面の笑みが貼りついている。鉄心は溢れるようなその笑顔に見覚えがあった

「もしや伊織君かの？」

「お久しぶりです。覚えていてくれたんですね！」

「久しいのう。立ち話もなんじやから、川神院に來なさい。そこに
いる御仁も川神院が責任を持って面倒をみよう」

男は川神院に運ばれ丁重に看病されることになった。

[illegible]

《川神院》それは武術の総本山と言われている。世界各地の自分の腕に自身のある武芸者がその看板を奪いにくることも珍しくはない。伊織と戦った男もその一人だったが、目の前に現われた兵と戦わずにはいらなかったのだ。

「ほれ、これでも飲みなさい」

鉄心に出された温かいお茶を口に運ぶ。一年程とはいえ世界を飛び回っていた伊織にとって久々に日本で飲むお茶だった。

「やはり日本で飲むお茶が一番ですね」

「その口ぶりから察するに、どこか海外にいたのかのう？」

伊織は祖父の家を出てからの経緯を全て話した。

「それは大変じゃったろう。…伊織君が引越して百代は悲しんでおったよ」

そう幼少期に伊織を救った人物は鉄心の孫娘・川神百代だった。

「自分が悪いのですけどね。僕自身も悲しかったです…百代さんはいますか？」

苦笑いをしたあと一瞬顔に影が出来た伊織だったが、すぐに元の表情に戻り尋ねた。

「モモのやつは学園の友人たちと遊びに出ているんじゃないよ。帰ってきたら伝えるでしょう。それはそうと今は何か武術をしているみたいじゃが……」

鉄心は先程目にした伊織の動きから武術に通じていることがわかっていた。

「ありがとうございます。……あれから僕は

説明中。

それで今は“陸奥”伊織と名乗っています」

“陸奥圓明流”は時代の影に生きてきた古武術だったが、伊織の祖父『陸奥九十九』が世界相手に喧嘩を売り、結果を残したことによってその名を轟かせていた。時が経つにつれ忘れる者もいたが、鉄心には覚えがあった。

「いつもモモの後ろをついて回っていた泣き虫坊主が、あの“陸奥”の後継者とは驚いたわい」

「僕自身が一番驚いていますよ」

鉄心の言葉に本心で応える伊織。誰かに助けられるしかなかった幼少期の自分を思うと恥ずかしい気持ちにもなった。

「ほっほっほ。この後何か用事でもあるかのう？なければ道場に着いてきてはくれぬか？」

「得に用事はないので行きます」

伊織はそう言うつと湯呑みに残っていたお茶を飲み干すと立ち上がった。

「それはよかった。ルーも喜ぶじやろう」

「ルーさんも居るのですか？懐かしいなあ」

ルーという名を聞いた伊織の顔はおもちゃをもらった子供のような表情になっている。

鉄心の思惑を知らない伊織は終始浮かれた様子で道場に向かっていった。

[illegible]

道場には何十人もの川神院の門下生・修行僧が鍛錬に励んでいた。年齢は上から下まで幅広く、女性の姿も見受けられる。

その中でも一際目立つ存在がいた。繰り出される拳は目にも止まらぬ速度で打ちだされ、振るわれる脚は空気を切り裂いている。その動きからはレベルの高さ、圧倒的な実力の片鱗が垣間見ることができた。

「ルーよ少しよいかのう」

「ハイ。何でしょうか総代？……あれ君は？」

ルーは鉄心の後ろに隠れるようにいる体の少年に見覚えがあった。

ことのある伊織です」

「おおー、覚えているヨ！懐かしいネ！あれからどうしていたんだい？」

「ルーよ、今からこの伊織君の戦いを見たいのじゃがよいか？」

鉄心の言葉を聞いたルーの顔が一瞬変わる。

「伊織君とですか？たしかに見るかぎり強いとは思いますが……」

そこまで言ったルーは言い淀んだ。目の前にいる少年からはたしかに強さが伝わってくる。しかし体が小さく、まだ力もないだろうと思ったからだ。それに今、道場内にいる者達は川神院の中でも強い部類に入る。

「まだまだ修行が足りんのう。伊織君はあの“陸奥圓明流”の使い手。見てみたいとは思わぬか？」

「“陸奥”ですか、実際に見たことはないですが名前は聞いた事があります。ワタシもまだまだですネ…興味がわきました。少々お待ち……」

そう言つとルーは一度この場から離れた。

「勝手に話を進めてしまつて悪いが、かつたかの？」

「見せるほどのものではないですが、お茶の御礼にやらせていただきます」

伊織は一度脱いだ武道着に着替え始めた。

祖父が若き頃に幾多の強豪たちと死闘を繰り広げ、血や汗が沁み込んだ大切な道着に袖を通す。

訪れた川神院（後書き）

口調などに違和感がのこりますが…。

もしココ直せ！って思う箇所があればご指摘ください

感想等ばっちり！

少年の実力（前書き）

なんちゃって戦闘回…。

少年の実力

ルーに連れて来られた数人の門下生・修行僧は表情を曇らせた。

「ルー師範代！！このような小さき者と戦えと仰るのですか？」

その中の一人がみなを代表するように口を開きそう言った。それもそうだろう、彼らの目の前にいる伊織の身長は160？程しかなくお世辞にも普通とは言えない小柄な体をしていた。童顔であることも合わさって見る人によつては小学生高学年～中学生くらいにしか見えない。

「ワタシもさつきは思ったことだが、人を見た目で判断するのはよくないことだヨ。彼は強い、油断していると足元をすくわれてしまふヨ？」

ただ彼らの思いとは裏腹に伊織には実力がある。

「師範代がそこまで仰るならやりましょう」

ルーの言葉を聞いた門下生・修行僧は渋々といった様子で了承した。

「……怪我をさせてしまう可能性があります、それでも構いませんか？」

「構わんよ。その時は川神院が全責任をもって彼の面倒をみよう」

まだ口を閉じない門下生たちを黙らせるように、これ以上相手（伊織）をバカにさせないために鉄心が口を挟んだ。

「すまないネ伊織君。彼らを許してやってほしい」

「許すもなにも、気にしていませんから大丈夫ですよ」

自分と戦わされる門下生たちの気持ちがわかるのか、伊織は本当に気にしていない様子でルーの言葉に返事をするストレッチを始めた。最後に笑いながら「それに慣れてます」と付け加えた。

ストレッチが終わり道場の真ん中に立つ少年からは、先程までの子供のような雰囲気は無くなっていた。そこには一人の武道家……いや、陸奥圓明流第41代伝承者“陸奥”伊織がその小さな体からは似合わない量の闘気を出しながら立っている。

「ここまで雰囲気が変わるとは別人じゃな。実に楽しみじゃのう」

「ええ、やはり彼は強い。体から出る気の量が凄い」

鉄心とルーは互いに思ったことをそのまま口にする。

「それでは試合をはじめろ。審判はワタシが務めさせてもらう。両者共に正々堂々と戦うように……では始めッッッ……！」

ルーの開始の合図を聞くと伊織は礼をし構えをとった。

「陸奥伊織です。よろしくお願いします！」

「よろしく頼むよ。……はあっ……！」

門下生の男はそう言うのと力任せに攻撃を仕掛けた。男の身長はおよそ190?、対する伊織は160?前後。身長差は30?もあり上から振り下ろすような正拳突きを打ち出している。体格の差に大きなアドバンテージのある伊織に対して力で押せば叩き潰せるだろうと考えた行動だった。

周囲の人間から見れば小柄な伊織が押されているように見えるが実は違っていた。

「（くっ！なんだコイツは！？まるで……岩のようだッッ……）」

実際に押されているのは門下生で、しっかりとガードを固め攻撃

を防ぎながらも伊織は足を前に出し前進している。手を出し攻めているのは門下生だが、ジリジリと後退を余儀なくされていた。

自分が後退していることに焦った門下生は力を込めようとし大きく振りかぶってしまった。

戦闘が開始されてから一番大きなモーションになり、それを伊織が見逃すわけもなく一瞬で間合いを詰める。

「え？……」

それ以上の言葉は聞こえなかった。伊織は門下生に接近すると顔に目掛け下から突き上げるように拳を出していた。

伊織の攻撃が直撃した門下生は脳を縦に揺らされ気を失いその場に倒れ込んだ。

「そこまで！勝者・陸奥伊織！！」

冷たい道場の床に寝そべるようにして倒れる門下生を見てルーが試合の終了を告げる。

「ありがとうございました！」

大きな声を出し礼をした伊織を周囲にいる門下生たちはどよめき、驚愕の表情で見つめていた。

こちら（門下生）が負けたことではなく、内容が内容だったためである。

体格に恵まれていない伊織よりも30？以上背の高い男の…それも門下生・修行僧の中でも力>パワー<のある男の打撃を受けつつも全く動じることのない気持ち>ハート<。防ぎきる硬い守り。前進しながら隙を見つけるなり一瞬で間合いを詰めた脚力。勝負を終わらせた一撃。

すべてにおいて予想を上回っていた伊織の実力を目の当たりにした、門下生たちは自分たちの考えが甘かったことに気付き認識を改めさせられた。

「続けて試合を始めるけどいいかな？」

「ええ、大丈夫です」

そう答えた伊織は汗1つ掻いていなかった。

「では、次の試合をはじめろヨ！両者前に出て…始めッッッ！！！」

「陸奥伊織です。よろしくお願いします」

先程と同じように礼をすると構える。

「よろしく」

伊織と対峙している男も構えをとった。今回の対戦相手は伊織の出方を見るように、守りを主体とした構え。不用意に攻めてカウンターをもらってしまい倒れた門下生を見ていたためである。

「これでは勝敗がつきませんね……僕からいかせていただきます！」

男の思惑を見抜いていた伊織だったが、前進し間合いを詰め攻勢にうつて出た。

小さな体からは正拳突き・廻し蹴りなどの様々な打撃を相手のガードする腕の上から叩きつけていく。

「（ぐう…やはり攻撃が重い……だが）」

自分に襲いかかってくる攻撃をガードをさらに固め耐えた抜いていた。そこに伊織の頭部を狙った上段廻し蹴りが迫る。

「そこッッ！……！」

門下生は自分を守る腕を1つにし、左から迫る廻し蹴りを間合いを詰めながら受け止め、カウンター気味に正拳突きを叩きつけようとしていた。

ガードする左腕に伊織の右脚が触れる同時にことは起こった。

男の頭部に蹴りが突き刺さっていた。それも右脚の蹴りではなく、左脚での蹴りが……。

「バカ、なっ……」

始めの蹴りとは違い逆方向からの蹴り、意識の外からの攻撃を受けてしまった門下生は崩れ落ちた。

「……そこまで！勝者・陸奥伊織！！」

コールの後、道場内は静まりかえっていた。

一試合目の門下生とは違い、今回の男は油断することなく試合に挑んだ。だが結果は見ての通り、手も足も出ないまま何が起きたのかわからないまま勝敗は決してしまった。それは彼らの心を揺るがせた。

これまでの試合を黙って見ていた鉄心が口を開いた。

「ハイ。あの廻し蹴りを見切れた者は、この中でワタシと総代の二人だけでしよう」

「廻し蹴りがくると思った瞬間、逆方向からもう一つの廻し蹴りが襲う。それも左右同時にな」

「あれが陸奥の技なのでしょう力？」

「違いますよ」

鉄心とルーの会話にトイレから戻ってきた伊織が口を挟んだ。

「ではあの技は伊織君のオリジナルかい？」

「あれは修業中にじいちゃんが使ったことのある技なんです。昔、自分と戦ったことのある人が得意といていたものらしいです」

伊織はルーの質問に包み隠さず答えていく。

「二回の試合をおこなったのじゃが、未だに陸奥の技を出していないとはもう……恥ずかしいかぎりじゃ」

「トップクラスの武道家ではありませんが、やられたのは川神院の門下生。そこらの武道家よりは強いはずなのですがネ」

鉄心は川神院総代として、ルーは川神院師範代として目の当たりにした現状を嘆いていた。

「どうじゃルー、お前さんが戦ってみるかの？」

「よろしいのですか？」

「伊織君よいかのう？」

「僕としては師範代のルーさんと戦えるのは光栄なことです。是非お願いします！」

鉄心の提案を快く引き受けた伊織は気を引き締めた。試合中と同じ表情になっている。

「決まったの。それでは次の試合はわしが審判をしよう」

突然決まった試合に道場内にいる門下生・修行僧の間に衝撃が走った。

「よろしく願いますルーさん!!」

「ワタシのこそヨロシク頼むよ!!」

伊織とルーは互いに礼をした。

「では始めようかの。いざ尋常にはじめいっ！！」

『陸奥伊織 対 ルー・イー』

これまでの試合とは違う内容の戦いが見られるだろう

少年の実力（後書き）

次の更新は明日以降になります
すみません……。

感想等ばっちり！

陸奥の名（前書き）

更新が遅くなりすみません…。
内容に不安もありますがどうぞ。

陸奥の名

川神院道場内は静寂につつまれていた。門下生・修行僧たちが見つめる道場の中心には二人の武人が向かい合って立っている。陸奥・圓明流 - 陸奥伊織と川神院師範代・ルー・イーの二人だ。

開始の合図がされ両者は構えをとると、相手の出方を窺うようにピクリとも動かなくなった。見ている者にもわかるくらいの緊張感が場を支配している。

「こうして対峙すると改めてルーさん、貴方の強さを実感します」

「ワタシにもキミの強さがわかるヨ。本当に別人みたいだね」

拳を一度も交えていない状態でも互いに対峙している相手の強さを察している。だからこそ安易に仕掛けることができずに、時間だけが過ぎていたのだった。

先程まで汗一つ掻いていなかった伊織の額には僅かだが汗が滲み出てきている。勇敢なのか、はたまた若さによる無謀なのかかわからないが先に動いたのは伊織。

「陸奥伊織！参ります！」

奮い立たせるために己の名を呟きルーとの間合いを詰める。試合が動いた瞬間だった。

持ち前のスピードを生かしルーに詰め寄ると右の上段廻し蹴りを

放った。それと同時に放たれる逆足での廻し蹴り。《双龍脚》二本の脚を龍に例え左右同時に廻し蹴りと言う名の顎アキトで相手を食い破る。「その技は一度見せてもらったヨ！来るのが分かっていたれば避けるのも容易い」

ルーは上半身を後方に逸らすことでいとも簡単に伊織の蹴りを避けた。

「そうみたいです」

伊織がそう言うのとほぼ同時にルーは動いていた。自らの拳を鉄槌に変え、脚を鎌に変え伊織に襲いかかっていく。

嵐のような勢いの攻撃だったが伊織はその1つ1つを完璧に見切り、難なく避け続けた。

川神院に訪れる前に見せた舞いのような動きをルー相手にも伊織はしている。

「単純な攻撃は僕には当たりませんよ」

眼前を掠めるように過ぎゆく蹴りを臆することなく見つめながら言葉を紡ぐ伊織。

逃げ続ける獲物を狩るようにルーのギアは上がり攻撃の速度が増していく。

伊織は徐々に余裕が無くなっていきルーの攻撃は掠めるようになる。今も頭髪を掠め焦げたような匂いに顔をしか顰めている。

「遂に捉えたヨ！」

伊織の一瞬の隙を見逃さずルーは師範代に昇り詰める為に振り続けた拳を伊織の体に叩きつけた。

伊織の体に拳が当たるとそのまま追い打ちをかけるように蹴りを放つ。

流れるような攻撃が直撃した伊織の体は空中に放り出され真横に吹っ飛ばされていった。

見ている者たちからは感嘆の声があげられている。それもそのはず、師範代の肩書を持つルーの攻撃が直撃したのだ。骨折していても不思議ではない。いや、骨折で済めば良い方……。

「いつまで、寝ているつもりだい？」

床に仰向けになりながら寝そべる伊織に対しルーは声をかけた。門下生たちには、その言葉の意図が理解できない。

「バレていましたか」

何事もなかったかのようにムクリと伊織は立ち上がった。

「やはりネ。当たった時の感触がほとんどなかったヨ」

伊織が昔、苦戦を強いられていた技だった。

「陸奥圓明流 - 浮身^{ふしん}」

「それは防御用の技だネ？力の掛かる方向に合わせ跳び、受けた際の攻撃の衝撃を逃がす」

ルーの攻撃を完璧に見切れる伊織だからこそできたことだった。

「全てお見通しのようですね」

「ようやく陸奥の技を引つ張りだすことができたようだ」

そう川神院に訪れてから伊織が始めて陸奥圓明流を使ったのだ。

「それでも…わかっただけでは破れない」

「そうでもないネ。対抗策はあるヨ！！ホオオ…アタアツ！！」

ルーは気合を入れると伊織に襲いかかった。

門下生たちには、ルーの拳が…脚が…まるで消えたかのように感じていた。実際に空気を切り裂きながら猛威を振るうルーの攻撃はほとんど見えない。

先程以上に速さを増した攻撃は伊織の体を捉える。

だがその攻撃すら伊織は完璧に見切ると浮身で防ぐ。胴を狙った

蹴りに合わせ左に跳んでいく。

「甘いネ！まだヨ……！」

ルーは空中を飛ぶ伊織に接近すると体を掴みそのまま地面に叩きつけた。

「がはっ……！！」

勢いよく床に衝突する伊織の体……。

「これが1つ目『衝撃を逃がす際に必要な空間を与えない』」

ルーの言う通り浮身には弱点があった。

今度こそ勝敗は決したように見えた。

が、伊織は体の痛みを訴える部分を押さえながら立ち上がると再び構えをとった。

「僕は……」

“陸奥圓明流”を受け継ぐ者として、自分を鍛えてくれた祖父への感謝を示すようにして、そしてなによりも幼い日に出会った少女のように強くなると誓ったから……

「絶対に負けられない！！陸奥圓明流・陸奥伊織、参る！！！！」

口上に“陸奥圓明流”と付けたのは単にカッコつけたのではなく、今から人殺しの技を使うという意味だった。

一気に変わった伊織の雰囲気を感じたルーは警戒を強めた。いつ、どこからでも来てもいいような柔軟な構えをとっている。

そんなルーに先程までとはまるで違う速度で肉薄していく伊織。詰め寄った伊織は急所目掛け次々に攻撃を繰り出していった。

「スピードが上がったところで、どうということはないネ！」

そう言うルーは伊織の攻撃を受け流している。それでも伊織は攻撃の手を緩めずに、勢いを増してルーに襲いかかる。

1つ1つの攻撃の威力が上がっていても、繊細さが欠けていては当たらない。受け流しつつもルーは伊織に接近していた。

「捕まえたヨ！冷静になりたまえ！！」

全てを薙ぎ倒す暴風のような攻撃を仕掛けてくる伊織の大振りのパンチに合わせカウンター気味に拳を放った。

「……………！！」

ルーの放ったカウンターは当たっていたが、伊織はルーの腕が伸びきる前に額で受け止めていた。

伊織が浮身を使うと思ひ込んでいて虚を衝かれたルーは一度距離を取る為に後方へと下がろうとしたが、それよりも速く伊織はルーに追いつがった。

ルーは危険を感じた。死の恐怖を……

伊織の纏う殺気はルー・イーが今まで経験したどんなモノより濃密で莫大な殺気だった。

ルーは川神院師範代である前に一人の武人。恐怖に打ち負けるわけにはいかなかった。

自らを奮い立たせる為、誇りを示す為に拳を放った。一秒の間にいくつも放たれる拳は弾幕の如く展開された。

だが、そんな拳の壁の僅かな隙間を縫うようにして伊織はルーの体に接近していく。

自分の攻撃が届く距離。それは相手の攻撃も届く距離。比較的体の小さな伊織の射程は短く相手の懐に飛び込まなくてはならない。だが一度懐に入ってしまったえば小柄な伊織には有利な状況を作りだすことができる。

そして遂にルーは接近を許してしまう。懐に飛び込まれたルーは伊織の頭に肘を落とした。

次の瞬間体勢が崩れたのはルーだった。

「（なんだコレは？一センチもなかったはずなのに……）」

ルーは必死にダメージを堪えパンチを繰り出す。それはルーだったからこそ耐えきれた。

しかしその拳は力無く空を切った。

いや、受け流されていた。

伊織はパンチを受け流しつつ、受け流した腕に自らの腕を巻きつけていた。残るもう片方の腕でルーの襟を掴むと投げた。

バキィィィー！！

その直後聞こえたのは、骨の音だった。もちろん投げられたルーの体からの……。

「陸奥圓明流・蔓落とし（かずらおとし）」

道場に響くのは伊織の声だけで、門下生・修行僧の誰もが声を失った。中には信じられないものを見た様子で目を見開いていた。

「そこまで！勝者・“陸奥”伊織！！」

静寂を破ったのは鉄心の声。

「ありがとうございます！」

礼をすると伊織は身に纏う闘気を納めた。

「痛てて、アリガトウございました」

「ルーよ気を使わなかったとしても、こっ酷くやられたのう」

「ええ、最後は関節が極められていて逃れられずそのまま投げられてしまいました。それにその前のアレをくらってしまったのはワタシのミスです。まだまだ修行をしなければ」

ルーは試合の評価を見ると、折れた腕に気を集め自然治癒能力を高めた。

「ルーさん大丈夫ですか？」

伊織は自分が折ったのを気にしてルーのもとへと駆け寄っていた。

「大丈夫だヨ伊織君。これでも川神院師範代、これくらいの骨折はどういうことはないネ」

ルーの言葉を聞いて安心したのかもう一度頭を深々と下げた。

「今日はありがとうございました！」

「伊織君頭を上げてくれ。ワタシの方こそアリガトウ。いい経験をさせてもらったヨ」

そう言いつつルーは折れている腕とは逆の腕で伊織の頭を撫でた。

「子供扱いしないでくださいッ!!」

「ハハハ、やはりキミは戦っている時とない時はまるで別人みたいだね」

ルーの言う通りに伊織は試合中でこそ一人の武人として見えるが、終わってしまえば年相応もしくは年以下に見える。

「うう…ほっといってください!!」

「今日はこれまでじゃな。伊織君今日は泊まっていきなさい」

「よそ者の僕がいいのですか？」

「構わんよ。頼んだのは此方じゃし、それにモモの客人じゃ。歓迎しよう」

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えさせてもらいます」

「夕食までゆつくりするとええ。門下生に部屋まで案内させよう」

こうして“陸奥”伊織として思い出の地・川神市に戻ってきてから、ゆつくりできたのは本日四度目の試合を終えてからだった。

陸奥・圓明流の名を再び世に知らしめる発端の日でもあった。

陸奥の名（後書き）

描写の悪さに拍車がかかりましたが、なんちゃって戦闘回も今回の話で一応終了です。

感想等ばっちこーい！

一日の終わり（前書き）

やっと更新できました

駄文製造機と言われても仕方ない出来に

一日の終わり

「おいじじい！」

「モモ、帰っておったのか」

鉄心をじじいと呼ぶ少女の名前は川神百代。武神とまで言われる鉄心の孫娘であり、現・武道四天王の一人。

「私のいない間に試合をしたそうだな」

どこから聞いたことなのかはわからないが、尋ねる百代の表情からは不満の思いが見てとれる。自分が戦えなかったのがよほど不服らしい。

「うむ」

「門下生が負け、ルー師範代までも負けたそうじゃないか。それも骨まで折られて」

「ルーの試合には言い訳にしかならぬがハンデがあった。…じゃが、それでも情けないかぎりじゃな」

百代にそう言う鉄心は一度溜息をついた。

「その相手って何者なんだ？ハンデがあったとしても川神院師範代は強い。そのルー師範代に勝ち、骨まで折れるヤツを私は知らない」

＝ ＝

今日のルーさんとの試合には勝った。けど、あれの試合には実際
1つ大きなハンデがあったんだよな。

互いの全力を出し切って戦って勝ったなら文句なく喜べるけどル
ーさんは気を使わずに戦っていた。だからあの試合は引き分けかな
と思う。

もしルーさんが気を使っていたら結果は変わっていたかもしれない。
い。

「それでも、僕は絶対に負けられない…」

コンコン……。

「どうぞ」

「夕食の準備ができましたので、食堂の方にお越しく下さい」

「ありがとうございます。今行きますので」

川神市に戻ってきてから一度もまともな物を食べていなかった伊
織は一度思考するのを止めると、立ち上がり宛がわれた部屋を出る
と門下生のあとを着いていった。

「陸奥殿は何故こちら（川神院）に？」

久々に食べれる日本食のことを考えている伊織の前を歩く門下生が尋ねた。

「百代さんに会いに来ました。昔にお世話になったことがあったので」

それを聞いた門下生は納得したような表情を浮かべる。

「そうだったのですか。ですがお気をつけください」

「????」

門下生の言った言葉を理解できていない様子の伊織だったが、漂ってくる美味しそうな匂いで夕食の方に思考が傾き礼を言うと言葉の意味を聞き返さないそのまま食卓に着いてしまった。

食事中は目の前に出される料理の数々をまるで吸い込んでいるかの速さで平らげていた。

「ごちそうさまでした」

「口に合ったようでよかったわい」

「はい！久々の日本食だったので満足しました。寝泊まりする部屋から食事までありがとございます」

「ほっほっほ、いいんじゃないよ。モモのヤツさつき帰ってきたぞい」

鉄心の言葉を聞いた伊織は飛び付くように身を乗り出した。

「ほんとですか！？あとで会いに行ってみます」

十数年ぶりに出会える時が近づいてきたのを、実感できた伊織の心臓の鼓動は自然と早くなっていた。

「うむ、そうしてやってくれ。じゃが……」

珍しく齒切れの悪い様子の鉄心。

「なにか問題でもあるのですか？」

そんな鉄心の様子にいち早く気付いた伊織はなんとなくだが嫌な予感がした。

「会えば分かることなんじゃが、今モモは強者との戦闘に飢えておつてな、今日の出来事（試合）も知っておった。気をつけるんじゃないよ」

一瞬自分の耳を疑ったがすぐに理解すると聞き返した。

「それってまさか…百代さんと僕が戦うってことですか！？」

「たぶんモモの方から仕掛けていくじゃろうな」

「僕には戦う気がないし、あと昼間にも言いましたが百代さんに会いに来ただけです」

「そうじゃったな。流石のモモでも戦闘の意思がないことを伝えられれば大丈夫じゃろうて。………多分」

最後の言葉を聞き逃さなかった。

「今、多分と言いましたよね？ちよつと！鉄心さん！どうにかしてくださいよ！！！！！」

焦りと泣きが混じった表情で鉄心にすぎるようにする伊織。

「善処しよう」

不安にさせるような一言を言い残し鉄心は伊織のもとから去って行った。

[illegible]

鉄心と別れたあと伊織は一人葛藤していた。

百代さんの実力は噂で聞いたことしかないけど……なんかビーム撃つとか、怪我を負ってもすぐさま直るとか、それはもう色々と……。

そもそも僕は戦う意思なんてないんだ。それを伝えれば済む！…

…はず。

会いたいののは山々なんだけど百代さんと戦うなんて御免被る。

そうだ明日にしよう！

明日にはココ（川神院）から出て行かなければならないから、その時百代さんと会おう。運がよければ戦わなくて済むし、もし戦闘になっちゃったらその時は逃げればいいしね。

ということでは今日は寝よう！！！！

多少強引ではあったが何とか答えがでた伊織はそのまま部屋に戻り睡眠をすることにした。

一日の終わり（後書き）

一人称みたいなものと、おそらく三人称が混ざり合った変な文章になってしまいましたがお許しを…。

感想等ばっちり！

思い出の再会

「はははッ！待てー！ッ！！！」

「嫌だあああああああ！！！！！！！」

笑顔で追いかける黒髪の美少女と必死の形相で逃げ惑う少年。傍から見れば黒髪の美少女がお姉さんで少年の方が弟、仲の良い姉弟に見えないこともない。

「なぜこうなつたあああああああ！？」

どこまでも逃げる少年が七浜市で目撃された。

数時間前。

川神院の朝は早い。太陽が顔を覗かした頃から起床し、各自鍛錬を行なっている。

伊織自身も日課である鍛錬の為に起きていた。今は道着に着替え終わり中庭でストレッチをしている。

「やってるネー」

「ルーさん、おはようございます。昨日の怪我大丈夫ですか？」

ルーの腕を見ながら言った伊織だったが、違和感に気付いた。

「あれ？その腕って…」

「もうほとんど治っているネ」

そう折れたはずの腕が普通に動いていた。

「腕よりコツチのが凄かったヨ。あんな至近距離でこれほどの威力のある技を受けたのは初めてだ。それも氣を使わずに」

服を捲ると陥没している部分が見えた。これは昨日の試合の中で決め手となった投げの前に伊織が出した技によって出来たものだった。

「拳を当てた状態から、全身の力を一氣に相手に叩きこむ。『虎砲』^{パワー}と言う技です」

包み隠さず技の説明をする伊織。本来“陸奥圓明流”は明るみに出ることのなかった格闘術だったのだが伊織の祖父によってその名と技を知らしめた為、今更隠すこともないのだ。

「二度と食らいたくない技だネ」

ルーは笑いながらそう言うのと伊織に組み手をしようと提案した。初めはルーの体のことを考えて断わろうとした伊織だがルーの「平気だよ」の言葉を聞き、断わり切れずに了承してしまった。

百代がランニングから戻ってくるまでの間、することのない伊織は『もし、百代と戦えばどうなるか』という想像をしていた。

想像中

ボコボコにされた僕。その上に立つ百代さん。

想像終了

「やっぱり無理だよねえ……」

自分で想像したくせにかなり落ち込んでいる様子の伊織だったが、先程ルーとの会話のなかで出てきたある言葉を思い出すと何とか立ち直った。

「百代さんに妹なんていたっけ？……ん？あれがそうかな？」

伊織の視線の方向には、少し離れた所からコチラ（川神院の門）に向かって走ってくる二人の姿が見えた。

「ねえねえお姉さま、門の所に人が立っているけどお客さんかしら？」

武道着を着たポニーテールの少女が門の傍に立っている伊織の姿を発見すると一緒に走っている姉に話しかけた。

「んー見たことは……ないな。私への挑戦者か？ワン子、先に行く

ぞ」

ワン子と呼ばれた少女の返事も聞かずに、伊織のもとへ近づいていく黒髪的美がつくほどの少女。

「（なんか嫌な予感が……）」

自分へと接近してくる百代と思わしき人物に一抹の不安を感じる伊織。

「お前挑戦者か？そうでなくとも私と戦え！」

「やっぱりー！！」

伊織の予感は見事に的中していた。

「もしかして百代さんですか？」

冷や汗を掻きながら尋ねた。

「もしかしくなくても百代だ。それがどうした？」

「……………」

「……………」

伊織と百代の両者の間には何とも言い難い空気が流れる。

「おーい！お姉さま待ってよう。……で、その人はだあれ？」

伊織たのもとへと遅れてやってきたポニーテールの少女。

「よくわからんがコイツ強そうなんだ」

百代がポニーテールの少女に気を取られ一瞬だが視線を伊織から逸らした。

「（チャンス！）とりあえず、戦略的撤退ッ！！」

「ち、ちよつと待てッ！」

百代の言葉を聞かず一目散に逃げ去って行った。

「お姉さまどうするの？」

少女の質問に

「なんか面白そうだから追いかけてくる」

そう言い追いかけたす百代。

「また行っちゃった……」

「やっぱりあんなっちゃったネー」

少女のもとへと来たのはルー師範代だった。

そして現在

「ハアハア……。も、もう無理……」

追いかけてこ（必死）に疲れ果てた伊織はその場に倒れ込み百代が追いついた。

「やっと観念したか。さあ私と戦え！」

こちらは伊織とは違い息１つ乱れていない。

「無理です。嫌です。勘弁してください」

伊織は最後の力を振り絞ってできるかぎりの言葉を連ねた。

「却下！さあ！私と！戦え！」

伊織の抵抗虚しく二文字で切り捨てられる。このあと5分程同じようなやり取りが繰り返された。

「何度も言わせるな。私と……ん？」

途中まで言っていると百代はあることに気付く。

「お前どこかで会ったことないか？」

「やっと話を聞いてくれる状況になった。……僕のこと覚えてない

かな？百代さん……いいや、モモちゃん」

「私をモモちゃんと呼ぶ男…… あっ！もしかして伊織か？」

ここにきて百代は今まで追いかけてこしていた少年が、幼い時に仲良くしていた少年だということに気付いた。

「そうだよ。思い出してくれた？」

「全然気付かなかった」

[illegible]

「十数年ぶりに会ったとしてもショックだよ」

言葉通りに顔に影を作り軽く涙目になりながら百代を見つめる伊織。

「いや……それは、あれだ」

百代はそんな伊織の様子に何かを言おうとするが中々言葉は見つ

からず、ますます慌てるという悪循環。

「そう！久しぶりに会ったお前が昔と変わってたからであってだな、私が気付かなかったのはそのせいだ」

「変わったかな？」

「そうだな。小さい頃はもっとうつ、見るからに弱そうな雰囲気だった」

「それはそれでショック。まあ本当のことだから仕方ないんだけどね」

百代の言葉に苦笑いをしながら答えるとしつかりと向き合う。

「ただいまモモちゃん」

「あー……おかえり」

思い出の中ではなく現実でようやく出会えた両者によって紡がれていく物語は幕を開けた。

思い出の再会（後書き）

この話でプロローグは終わりです。

ここまでお付き合いありがとうございました！

今後続く『開かれる修羅の門』をよろしく願いします！

回り出した齒車

世間からのはぐれ者が大勢いる親不孝通り。暴力、薬の売買、窃盗など法に触れることが横行している地域。

「た、助けてくれえ……」

顔面蒼白で救いを求める声を出す男の周りには仲間と思われる者たちが倒れている。あるものは腕の骨を折られ、あるものは顔の一部が陥没し、またあるものは恐怖のあまり白髪化している。

「……………」

男の声など気にせず腕を振りかぶり容赦なく叩きこんでいく。血が飛び散ろうと相手の骨が折れようと一切手を緩めない。

「その辺にしておいたらどうですか？もう行きますよ」

突如物陰からこの場に似合つかわしくない落ちついた声が響いた。

「………… お前か。今行く」

落ちついた声の主に返事すると殴っていた手を止め振り返り闇に溶け込むようにこの場を後にした。

[illegible]

1 週間程前

「今までどうしてたんだ？」

あの別れの日から十数年、何の音沙汰もなかった友人と出会えた百代は率直に聞いた。

「んーそうだね、どこから話そうか」

伊織は百代に離れ離れになってからあつたことを思い出話も混ぜつつ話した。

「そうか。だからそんなに強くなっていたんだな」

実際に戦ってはいないが百代には伊織のおおよその強さを感じ取ることができていた。

「まだただけどね」

人懐っこい笑顔で答えるとポケットの中からあるものを取り出す伊織。

「まだ持っていたのか」

「うん。これは大切なモノだし、僕にとっての誓いでもあるんだ」

伊織の手のなかにあったのはボロボロになった帯。別れる際、一向に泣きやまない伊織に百代が渡したものだっ

この後、二人は小さい頃の話を持ち笑い、時に恥じらいながらも話していた。

「今日はもう遅いから川神院に泊まってくとい。じいには私から話をつけておく」

「ありがとう。そうさせてもらっよ」

「ああ、じゃあ帰るぞ」

七浜市から川神市までの道程を笑いながら歩く二人の姿があった。

翌日の朝

「ふわあ……眠い」

朝日が昇りかけている頃に目を覚ました伊織は、日課である鍛錬に向かおうと眠気眼を擦りながら長年愛用している道着に袖を通して外に出た。

外はまだ気温が上がっておらずまだ肌寒く、起きたての体には丁度いい眠気覚ましになる。

ストレッチで体をほぐしランニングをしに行こうと川神院の門をくぐったところである人物に出会った。

「おはよう伊織君」

「おはよう一子ちゃん。走りに行くんだったら僕も一緒にいいかな？」

「うん。でも結構走るけど大丈夫？」

「大丈夫だよ。僕に構わず自分のペースで走ってね」

一子は頷くと先に走りだした。それに続くように伊織が走りだす。

七浜辺りまで走ったあと折り返してきた二人は多摩川の河川敷で休憩していた。

「いつもこれくらい走ってくるの？」

目の前で体を動かし続ける一子に声をかける伊織。

「うん。目標があるから、そのために努力しないといけないの」

「目標？よかったら教えてくれないかな」

「川神院の師範代になってお姉さまのサポートするの」

一子の言葉を聞いた伊織は微笑んだ。

「そっか。だったら僕応援するよ。何か力になれることがあったら言ってね」

心からの言葉だった。目標は高いがそれに向かってひたむきに努力する一子の姿を見て純粋に応援したくなったから……小さい頃ヒーローに見えた少女に近づくために必死だった自分と同じようにがむしゃらに努力する姿に似ていたから。

「ありがとう。じゃあさっそくいかな？」

「いいよ。僕にできることなら」

「せやーッ!」

気合の入った大きな声と共に前進する。力強く地面を蹴る脚は先程まで長い距離を走って疲労が溜まっているものとは思えない。

勢いをそのまま拳に乗せ真っすぐに撃ちだす。手加減なんて微塵もなく全力をぶつけるような一撃だった。

「思い切りと踏み込みはいいけど、まだ体重が乗りきってない」

自分に迫ってくる拳を軽く受け流しつつ接近すると、下から掬い

あげる形で拳を突き出す。が、その拳は当たることなく相手の顎先数センチの所で止められていた。

「勝負ありだね」

静止したままの状態で声を出したのは伊織だった。真剣にはしているものの本当に攻撃が当たって怪我をしては鍛錬どころではないため寸止めで行なっていた。

「もう一回お願いできるかな」

負けず嫌いな性格と前向きな思考の持ち主である一子は諦めずに繰り返し行なうことで成長する。短時間で彼女のタイプをおおよそ掴んだ伊織は嫌な顔1つせず頷くと元の位置に戻ると構える。伊織には付き合っているという感覚はなかった。

「何度でも」

回り出した歯車（後書き）

始まりました第一部！

書き直していたものがついに無くなりました

感想等ばっちこーい！

新たな出会いとヒーロー（前書き）

前話から一週間程経過した話です

新たな出会いとヒーロー

「日ごろのお礼に川神市を案内するわ!」

伊織の一日は一子の、この言葉から始まった。

一子の“日ごろのお礼”というのは毎朝走り込みのあとに行なっている素手による手合わせのことだった。

伊織自身は付き合っているという感覚はないのだが、一子としては何かしたいらしく、考えた結果“川神市の案内”という形に収まったのだった。

幼い頃に川神市に住んでいた伊織にとっては懐かしい場所を巡るいい機会だと思い、この申し出を快く受けることにした。

朝の鍛錬（走り込みと手合わせ）も終わり朝食を取った伊織と一子は川神院を出て仲見世通りを歩いていた。

仲見世通りには多くの土産屋や、和菓子屋があり観光客などの姿も見受けることができる。

「あれ？ ワン子じゃん」

伊織と話しながら歩いていた一子に話しかける人物が現われた。一子たちが声のした方に視線を動かすとそこには和菓子屋の店員服を着た一人の少女が立っていた。

「チカリンだー。今日もお店のお手伝い？」

「そうなのよー。で、その隣にいる男の子は誰？子守か何か？」

一子と話しながらチラッと伊織に視線を動かしチカリンと呼ばれた少女は尋ねた。

少々失礼な聞き方だったが、彼女が子守と思うのも仕方なかった。一子の隣に並ぶように立っている伊織は同年代の男子に比べ身長が低く、童顔なため年下に見られてしまうのだ。

「彼は川神院に泊まっている伊織君っていうの。アタシと同じ年で決してその……」

「気を使わなくてもいいよ一子ちゃん。自分でも気付いていることだしね」

一子の考えていることを察した伊織はハハハと苦笑いのような表情をしながら、助け舟を出した。

「うわー、ごめんね伊織君。失礼なこと言っちゃったしお詫びにアタシの家の久寿餅でもご馳走するよ」

「いえいえ、ではお言葉に甘えてご馳走になろうかな」

「チカリンの家の久寿餅は川神市でも美味しいって有名なんだからあ」

「じゃあ楽しみにしなくちゃだね」

「今はまだお客さんもあまりいないから、好きな所に座って待って。あ、あとアタシは小笠原千花だから好きに呼んで」

そう言つと千花は店の奥に一度入って行き、数分で店自慢の久寿餅を二人分とお茶を持って二人のもとへと戻ってくると、「食べ終わったら呼んでね」と言い再び店の中に消えて行った。

「なんだか忙しそうだね。あ、本当に美味しいや」

目の前にある久寿餅を口に頬張りながら素直に感想を話した。

「でしょう。アタシもたまにだけどココに食べに来てるんだあ」

褒められたのは久寿餅だったが、まるで自分のことのように喜ぶ一子を見て伊織は微笑ましく思えた。

数分で平らげた二人は千花にお礼を言つと、また川神市を歩くために店をあとにした。

和菓子屋でお腹を満たされた伊織と一子は河原に来ていた。

唐突に伊織は口を開くと続けて話出した。

そこから伊織は、過去の自分がどんなふう^に過^ぎしていたか、その時出会った……いや、突如現れた少女の事を全て一子に打ち明けた。

「うん、そうだよ。あの頃の僕には本当のヒーローに見えたよ」

伊織は嬉しそうに、それでいて大切な思い出を確かめるように二子の質問に答える。

「少しは聞いたことあったけど、しっかり聞くのは初めて」

「ハハハ、僕にとっては大切な場所だからまた来たいな」

そのあと日が暮れるまで幼い頃の思い出を伊織が話し、それを一子が聞くと、という風景が多摩川の河原で見られた。

[illegible]

簡単に人は壊れる……

折れた骨が皮膚を突き破り見えてしまっても

口内がズタズタになり血しぶきが舞っても

内臓がやられ汚物を吐きだしても

「止められない！そう、俺は力を手に入れたんだあ」

言葉に狂気が宿り、手に込める力を強め、気を失った相手を殴り続ける。

過去の自分は弱者だった。だから強者に屈するしかなかった。

強者になった今は

「僕が……いや、俺が蹂躪する番だあああああ」

獣の叫びは夜の街の喧騒に掻き消され彼に気付くものはいなかった。

新たな出会いとヒーロー（後書き）

チカリン及びワン子の口調がグダグダに…orz
なにか指摘があれば仰ってくださいませ

次はバトルの予感がある、のか？

1つの作品もまともに書けていないのに、もう1つ別作品を書こう
としての私はダメ作者……なんだろうなあ……

感想等ばっちこーい！

悩める乙女と決意する少年

「どうすれば……」

ブツブツ呟いているのは川神百代。彼女は今、かつてないほど悩んでいた。

悩みの種となっているのは最近になって川神市に帰ってきた少年。悩んでいる姿からは一見するとその少年に恋をしている乙女のように見える。

「こんなことだったらあの時無理やりにも戦えばよかった」

が、現実はそのなにごとにも甘くはなく言っていることは物騒な内容だった。

「うーん……」

百代の知っている少年はひ弱で泣き虫ないじめられっ子だった。だが帰ってきた少年は強くなっていた。

目の前に現われた強者を黙って見ていることはできるわけがない。それほどまでに百代は強者との戦闘に飢えている。

すぐにも襲いかかりたい衝動をどうにか抑えてはいるが、いつ暴走するかわからないような状態にあった。

相手が心良くコチラの要望に応えてくれるならばここまで悩む必要はないが、戦いたい相手は『戦わない』と頑なに断わっていた。それで百代は諦めきれずこうやって頭を抱えて悩んでいるのだった。

「くそー、どうすればいいんだ……頭を使うのは苦手だ。こういう時はアイツの出番だな」

自分一人では解決策が浮かばなかった百代は抱えている頭から手を離し立ち上がると、川神院から飛び出すようにして駆け出して行った。

「それで俺のどこに來たわけね」

「そうなんだよ弟」お前なら何か良い案浮かぶだろ？」

百代が助力を求めたのは百代と同じくらいの年頃の少年。弟と呼ばれてはいるが本当に血が繋がっているわけではなく、百代が舎弟として可愛がっている後輩であり、風間ファミリーと呼ばれるグループのメンバーの一人で頭の切れる少年・直江大和だった。

「いきなりそんなこと言われても困るよ姉さん」

「それをどうにかするのが弟であるお前の役わりだろ？　　とうにかしろ」

頼みごとをする立場の人間が言う言葉ではないが、百代がここまで大和に頼るのは彼の事を信頼しているからだろう。

「……仕方ない。でも俺はその子を知らないから今度会わせてほしい。話はそれからだね」

一度溜息を吐きやれやれといった感じで頼みごとを受け入れた大和だが嫌々受け入れている様子は微塵も感じられなかった。自分が姉と慕う百代の悩みを解決できるなら助力を惜しまないと思う優しい心と、百代がここまで執着する少年のことが気になる個人的な興味からの言葉だった。

「わかった。今度連れてくるが悟られないようにしてくれよ？」

「それは安心して。ファミリーで遊ぶ日に呼べばいいよ。俺からキヤップにも話しておく」

「それでこそ私の弟だ」

数十分前まで頭を抱えながら悩んでいた百代だったが、大和の力を

借り解決の兆しが見え、今はカラカラと笑い大和の背中を豪快に叩いていた。

月明かりが照らす多摩川の河川敷

年季の入った道着を身に纏った姿で額に浮かんだ汗を拭い対峙している一子に話しかる伊織。

「僕の方こそありがとうございました」

「まだ元気みたいだけど体の使い過ぎには注意しないとね。いきすぎた鍛錬は体を壊す。だから適度に休まなくちゃ」

「でももつと鍛錬に励まないと川神院の師範代になれないから」

伊織の言葉を聞きながらも一子は今日の鍛錬を思い出しながら体を動かし続けている。決して無視しているわけではなく一子の焦りからくる行動だった。

「んー……僕と試合しよう。寸止めなしの真剣勝負を」

「え？ いいの！？」

突然の申し出に驚いた一子だったがそれ以上に伊織と戦えることが嬉しいらしく、眼をキラキラと輝かせながら聞き返す。

「うん。……でもこれで僕が勝ったらさっき言ったことを守ってほしい」

伊織は真剣そのものだった。口調こそ穏やかなものだが、一子を見る目には強い意志が込められていた。

「今は一子ちゃんの得物がないからまた明日の夜この場所でしょう」

「わかったわ。何があっても明日は勝負してもらうから」

「約束するよ。あと今日は先に帰っておいてくれないかな？」

真剣な表情からいつもの人懐っこい笑みを浮かべる伊織。

「どこかに行くの？」

「昔、お世話になった人に少しね。鉄心さん達には帰りは遅くなるので、と伝えておいてくれたら嬉しいかな」

「じゃあ先に帰るね。あッ、ないと思うけど親不孝通りには近寄っちゃダメだって大和が言ってたから気をつけてねー」

川神院に向けて帰っていく一子を見送った伊織は振り返り

「いつまでそうしているのですか？」

と小さく、それでいて怒気を感じさせる口調で話しかけた。

悩める乙女と決意する少年（後書き）

短くてすみません…次回更新時には5000文字!という願望

感想ばっちこーい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6447p/>

真剣で私に恋しなさい！！ - 開かれる修羅の門 -

2011年7月11日14時44分発行